

# ニュージーランド・ホリダイその7

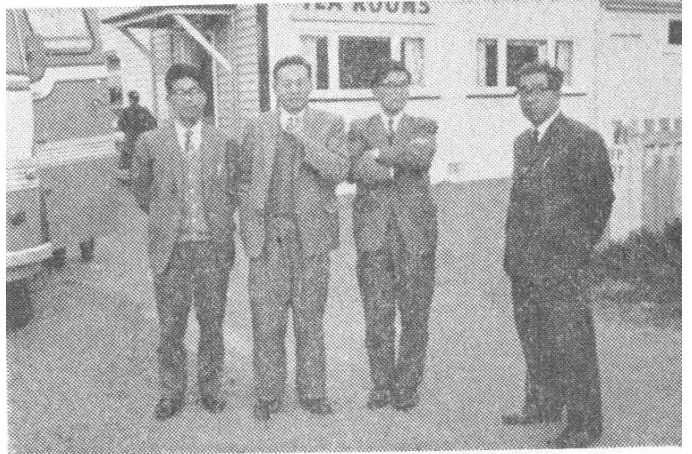
竹原 宏

## 7 歩行者優先

ニュージーランドで懐かしく思ったのは、左側通行である。街には自動車が多い。そしてこの自動車は誠に礼儀正しいのである。

我々は、日本の自動車の恐ろしいことをよく知っているから、信号機のない所を横断する時は、どうしても躊躇する。道路端に立って右をみたり左をみたりしていると、車は一斉に停止してくれる。まごまごしていると、運転台から早く渡れと、手を振ってくれる。10台も20台もの車が、私1人の横断が終るまで停止して、待ってくれるのである。全く文字通りの歩行者優先である。街の交叉点には、信号機がある。この信号機は、人が横断する時は、全部の車をストップさせてしまう。おまけに歩行者は斜方向の横断も自由である。斜めによこぎるときは、信号機の下の方にボタンがあり、これを押して渡ればよい。だから人が横断を始めると交叉点は人の群で一杯になる。次に「注意」の信号が出て、その次に車の「進め」という信号が一方向づつ出る。我が国のように、一方向の人も、車も、同時に横断するのではないから、横断中は安心して歩けるのである。

バスは、すべてワンマンカーである。街角にバスの停留所があって、行列をつくって乗るのであるが、切符はバスの中で運転手から買うのである。運転手は、一人々々に切符を売って、釣銭を払い、愛敬も振りまいて運転するのである。乗客は降りたい所に来ると、座席上の革緒を引張り、運転席のブザーをならす。バスが停ると後方の降車口から降りるのであるが、切符を出口の箱の中に捨てて行くので、乗客が1区乗ったのか2区乗ったのか、前にいる運転手には解らない。時には、婦人が乳母車を押して来ることがある（ついであるが、乳母車はデパートでも自動車の中でも天下御免である）。こんな時は運転手はわざわざ車から降りてきて、乳母車を畳んで、バスの後に引懸けてやるのである。こんなサービス



長距離バスのお茶の時間

まで運転手は一人でやるのである。

私達は、ウェリントンからハミルトンまでバスの旅をした事がある。ウェリントンを朝8時に出発して、ハミルトンに夜8時に着いたのであるから、12時間もバスに乗ったことになる。しかし、少しも疲れを知らなかった。道路は広く、完全舗装ですばらしく、100キロくらいのスピードでも全然不安感はない。8時に出発して10時になると、例によって、お茶の時間である。喫茶店の前に停車して、運転手は降りてしまう。12時になると昼食で、30分間休憩である。3時になると、またお茶の時間である。休憩の時は、乗客はお茶を飲んだり、町を見物したり、全く観光バスに乗っているようである。

ニュージーランドは、自動車や飛行機が発達しているから、汽車に乗る人は余りない。ウェリントンの駅の構えは大きい、乗客は極く少ない。何時もガラントしている。

面白いことに、改札口がないのである。乗客は出札口で切符を買って汽車に乗ればよい。汽車が発車してしばらくすると車掌が検札に乗る。その時切符もとりあげてしまう。その先は何処まで乗っても解らない。

サツマノ守など平気でやれる仕組みになっている。しかし、誰もやらぬらしい。

## 岡山畜産便り 1965.08

私はこの事があるニュージーランド人に話したところ、彼は不審な面持で次のように答えた。「いや日本だって、朝鮮動乱の時は、入場券で、門司から東京まで汽車に乗せてくれたよ。」といった。青い目で見ると、我が国も紳士の国かもしれない。新聞は人通りの多い街角の箱の中においてあり、3ペンス(12円)入れて下さい、と書いてあるだけで、誰もいないのである。全くのんきな国である。

あるホテルで、外出するから部屋の鍵をくれといったら、鍵代 500 円を預けて行けという。泥棒よりも、鍵をなくされる方が心配らしい。人をみたら泥棒と思え式の、我が国の社会とは全く縁遠いものである。

ニュージーランドは、週5日制である。土曜日は全日休みである。官庁も商社も、商店も休みである。我々旅行者は行く所がなく、全く退屈な日である。

競馬は、この土曜日に行われる競馬場は、我が国のものと観念的に違う。彼等は競馬場を社交場と心得ている。そこで、老も若きも正装して出向き、1日を楽しく過ごすのである。予想屋が、がなりたてたり、血走った眼をしている人は1人もいない。裏側のコーヒー・ショップで、コーヒーを飲んだり、酒屋でウィスキーを飲んで、レースをみて楽しむのである。馬券は 500 円である。大抵の人は、新聞の切抜きの予想をみては、1レースに1、2枚の馬券を買って楽しんでいる。余り熱心に馬は見ておらぬようであった。私達が行ったウェリントンの競馬場で、最後のレースで5番と8番の馬が同時に2着に入った。審判台は5番が2着であると放送したので、8番の馬券を持っていた人は馬券を捨てて、大半は帰ってしまった。それから20分くらいして写真判定の結果、8番が入賞している、と訂正した。そして払戻口は、8番券に3,000円の払戻を始めた。我が国でこんな誤審をしたらどうだろう。たちまち審判台は弥次馬に取囲まれて大混乱に陥るに違いない。しかし、彼等は誰れも不服をいう者はない。当り券の8番券が風に吹かれて、足下を舞っているが、拾う者はおらない。

善意の上に築かれた社会が如何に美しく、信頼し合うという事が如何に社会の無駄をなくするかという事をしみじみと朕に味った次第である。